

<コラム>

エイムズ唯子の「心理学の周辺」



第8回：「黒、が好き」の巻

春をまちわびていた3月、茶道の先生のお稽古場の掛け軸は「花知鳥待花」。花は鳥を知り、鳥は花を待つ、と読むと教わりました。鳥たちがにぎやかに集い、いまや遅しと草や木が色とりどりの花をつける季節がやっとなめてきたというのに、黒について書きたくなってしまったのは、やっぱり私があまのじゃく、だからなんでしょうか。

すべての光の色が集まると透明になるけれど、すべての絵の具の色を混ぜると黒になる、とどこかで読んだ気がします。すべてであって、そのいずれでもない黒は、やっぱり魔性の色なのかもしれません。私がひそかに、しかしこよなく愛す魔性の黒は、バレエ

「白鳥の湖」の「黒鳥」です。かよわく美しい悲劇のヒロインである白鳥のオデット姫ではなく、悪魔ロッドバルトの娘で、若き王子をかどわかし、純愛をあざ笑う黒鳥のオディールが好きだというと、たいがいは妙な顔をされます。なので、黒鳥好きはあまり人様に言わないようにしていたのですが、この春休みに映画「ブラック・スワン」（2010年、アメリカ）を見て気が変わりました。

スリラー仕立てで話題になった映画ですが、実は一人の女性の成長の物語でした。主人公は、元バレリーナの母から子ども扱いされるままに育ち、いつかプリマドンナの座を射止めたいと稽古に励む日を送っていました。君の踊りははかなげで美しく、白鳥のプリンセスにはうってつけたが、妖しい魅力を持つ黒鳥は踊れないよと振付師から一蹴されながらも、おもいがけず主役に抜擢されます。彼女は、その壁を越えようとしていますが、そこへ立ちただか

ったのは、ほかでもない母、そして自分自身でした。出産のためステージを降りた口惜しさから、娘の成功を素直に喜ばず、彼女を自分の手の中にとどめようとする母の存在は、じわりじわりと真綿で首を絞めるような息苦しさに変わっていきます。あらゆる制約をふりほどいて己の心と身体を解き放ち、黒鳥を踊り切りたい自分と、母のかわいいお気に入りであり続けたい自分のせめぎあい。バレリーナがその後

どうなったかは、ぜひ映画を見て頂くとして、白鳥と黒鳥をひとりのプリマが二役で踊り分けるみどころを軸に、バレエしか知らなかった少女が、清濁あわせ持つおとなの女に変化していく様を描きだしたところに唸りました。自分のさらなる可能性を諦めず、成長を

遂げるためには、人は時

として小さな弾丸、あるいは黒々と光る正露丸の粒のように、どこかへ向けて突き進まなければならないこともあるのです。白があつての黒、黒があつての白。白は黒を知り、黒は白を待つ。

偉大なる作曲家チャイコフスキーは、「黒」は小粒でびりりと辛いのが身上だとよく心得ていたようで、黒鳥の場面は意外に短く、オディールは風のように登場して、嵐のように去って行きます。英国ロイヤルバレエの至宝と言われたマーゴ・フォンテーン（1919-1991）が踊る黒鳥は見飽きぬ美しさではありますが、あまのじゃくはこのくらいにして、私も鳥たちと共に、花を愛でに野へ山へ出かけることにしましょう。

（高崎健康福祉大学准教授、フォーラム共同研究者）



今年3月に卒業したゼミ生と。卒業式の黒は身がひきしまり